

## 2009年4月21日のチャンネル桜に於ける柯徳三氏の感情的発言について

2009年4月21日、チャンネル桜によるインタビューの中で、柯徳三氏が日本統治時代に於ける日本人に対する個人的恨みの感情に任せて、弊社より出版した著書（『母国は日本、祖国は台湾』2005年8月刊）に於いて、日本統治時代の負の面に関する記載を弊社が全部削ったと嘘を語ったことについて、ここに真実を明記する。氏の発言は真っ赤なウソであり、その場限りの無責任な発言であった。彼が語った負の面については、下記の通り、一つを除いて全て掲載している。

除いた一つも、柯氏の私怨によるものと判断し省いたものであり、その判断はマスコミ規範に照らして妥当であると考えている。

その一点についての文句であればまだしも、全て削除されたと公の場で大ウソをつかれたことは、誇りを持って出版している者として許容し難いことであり、甚だしい名誉毀損であり、誠実に対応した者として誠に残念である。本を読めば、誰でもが直ぐに確認出来ることである。

2009年4月21日のチャンネル桜「【台湾取材レポート】柯徳三氏インタビュー」の放送後、弊社からの抗議に対し、柯徳三氏は、自身の発言について、「冗談のつもりだったが迷惑をかけてしまった」と、弊社に詫びている。また、本人による訂正は、YOUTUBEなどにアップされているチャンネル桜の同番組の中で公開されている。しかし、これも、「言った覚え、あんまりありませんけどね、言ったように思いますけど」と前置きした上で、謝ることもなく、「全部削ったんじゃなくて一部削ったという具合に直してくれたらいいと思います」という非常に不誠実なものであった。

柯氏は、相手の気持ちが全く分からない人のようなのである。この件は、軽い気持ちで言って、すみません、と謝って済むレベルのことではない。この程度の軽い謝罪は、個人的な話の中で、ちょっと悪口を言った程度のことに対するものであり、半永久的に放映され続けるインターネットテレビ上で、事実無根の非難をしたことに対する謝罪としては、あまりに軽すぎる。

柯氏は、台湾人であるが故に日本人から虐められ、差別された経験をもっと掲載してほしかったと主張していたが、氏と日本人との間のトラブルが、氏のこうした性格に基づく個人的なものではないかと今改めて思う次第である。

柯氏の謝罪により、弊社も許し難いことを許すことにし、いったん矛を収めたが、本来ならばこのようなものを放送したチャンネル桜にも問題がある。それでも、訂正を入れた分、まだチャンネル桜には誠意があった。しかし、弊社にしてみれば、明らかな会社のイメージダウンであったことは否定しようのない事実である。イメージとしての損失は極めて大きい。

### ■印税の支払いに関する合意事項

また、2009年4月21日のチャンネル桜のインタビューでは、柯氏は「私は、印税ひとつももらっていない。（著書を）20冊くれただけで。あの時の成田さんのお断りは、桜の花は小さい会社だから、あんまり印税なんか出せないから、もしも1000部2000部以上売れたら印税出しますよとか言いましたけどね。恐らく売れてないからくれてない（笑）」と語っている。

この言葉は、本人は軽い気持ちで言ったことかもしれないが、悪意のある人間が聞けば、弊社があたかも印税を払わず誤魔化しているかのように取られかねない言い方であった。そもそも1000部2000部売れたからといって印税を払えるとは言っていない。売れて黒字になったら喜んで印税を払うが、ならない限り、申し訳ないが出せない、という約束であった。

この2009年4月時点では、『母国は日本、祖国は台湾』は130万円以上の赤字であった。

ここ1、2年は急激に反韓反中系の書籍が大量に出回るようになったが、当時においては全く相手にされていない分野であった。書店に置いてもらうことさえ難しいシビアな状況であった。その中で、弊社は、日本の将来のため、当時を知る市井の人の証言を残すことが重要と考え、それを使命として赤字を当然として出版を続けてきたものである。それゆえ、取材相手にも儲けが出ない限り印税は出ませんということを絶対条件として取材に応じてもらっていた。

出版の意義と弊社の事情を説明すると、著者の方々、特に台湾の方は皆喜んで主旨を理解して下さり、日本ばかり悪いと言われているが、それは違う、と弊社の出版活動の意義に賛同し、喜んで協力して下さった。その合意の上で、出版しているものである。合意しながら、このようなことを言われたのは、柯氏一人である。

ただ、この件があったことによって、弊社のプライドは著しく傷つけられ、以降、全く売れないと初めから分かっている本までも、本を刷った時点で、原則として刷り部数に合わせて印税を支払うことに変更した。しかしこれは、社のためではなく、日本国と日本人の為にやっている身としては、非常に大きな出費となった。それによって売れないことが明らかだが国にとって非常に重要な本の出版を見送らざるを得なくなったことは、極めて残念である。

この変更直後に、柯徳三氏に対しても印税を支払っている。

## ■出版の経緯

さらに言うならば、柯徳三氏の著書『母国は日本、祖国は台湾』の原稿は、2004年3～4月と12月の2回にわたって取材を行ない、テープおこしをして原稿の形にまとめて、柯氏に校正し承諾をもらったものである。柯氏自身が書いた部分は5ページ程度に過ぎず、弊社がまとめたものを、最終的に内容の確認と出版の了承を柯氏からもらった上で、2005年8月に刊行している。本来ならば、取材し執筆した人間が、ルポルタージュとして出版してもおかしくないものである。それを取替えて、発言者を明確にするために著者として冠しているのが実態である。2009年4月21日のチャンネル桜のインタビューでも、柯徳三氏自身が、最終原稿を受け取り、納得し了承した上での出版であったことを認めている。

## ■柯氏が削除されたと主張した3つの内容

柯徳三氏にとって、日本人から差別された、いじめられた、という感情は非常に強いようである。善意に解釈するなら、2004年の取材と2005年の本の刊行から時間が経っているがゆえの記憶の混乱に伴う、一番言いたかったことが掲載されなかったという不満によって、2009年4月の全ての発言が削除されたという無責任な発言となったと思われる。

2009年4月21日の放送後、柯徳三氏に対し、成田から電話をして、どのような内容をカットされたと感じているのか聞いたところ、以下の3点だと氏は答えた。

- ①御真影に最敬礼する時、同じクラスの人から、お前は笑った、と言い掛かりをつけられた。 →P136に掲載。  
(これも言い掛かりをつけた方に話を聞けば、笑ったと見えた可能性はある)
- ②大学2年の時に、昔の同級生に再会し、懐かしくなって声をかけたら、いきなりほっぺたをぶん殴られた。 →P176に掲載。(しかし、こういうことは通常はあり得ず、同様の話を他の台湾の方々から聞いたこともない。今となって思えば、これも氏とその人物との一対一の関係であったと思われる。)
- ③中学時代に、他の商業学校の生徒と初めは仲良く図書館で本を見ていたのに、台湾人だとわかると、追いかけて

てきてぶん殴り制裁しようとした。→この③だけが氏が言っているところの削除されたという内容である。(これも台湾人だと気付いただけで、そこまで執拗にする生徒がいたとは考えにくい。その前に柯氏と彼との間に何らかの感情的諍いがあったのではないかと思われ、それを柯氏が説明することなく、ただ殴られたと言っている可能性は高い。そのためこの話は掲載しなかったのである。そういう意味では、②も同様であるが、柯氏の心情を慮って載せたのである。もしこういったことが日常的に行なわれていたとしたならば台湾人がその後、現在に到るまで継続して日本人に好意を持ち続けていることは考えにくい。それからして、個人的な体験ではないかと思われる。)

上記のように、柯氏が載せて欲しかったと言っている3つのエピソードは、その2つが掲載され、1つは上記の理由で敢えて掲載されなかった。

掲載しないと判断した理由は、前述のように、氏の語る差別や虐めの体験が、同時期に日本統治を体験した人たちと比べて大変多く、その原因を、氏は全て、日本人による台湾人に対する人種差別と結論付けているが、そこに疑問があったためである。柯徳三氏の体験は真実であったと思われるが、そうなった理由付けは、この件については人種差別ではなく、個人間の問題だと判断したためである。

正に、今回のことで分かるように、氏は、互いに納得の上で合意した約束事について、一方的に破ることを何とも思っていないだけでなく、他人を傷つけ著しい迷惑を掛けることや、他人の名誉を毀損することについて、何とも思っていない人物である。日本人に限らず、真面目な人たちにとって、そうした人間は信用に値せず、腹立たしい相手として、仲間外れや差別の対象となったことは想像に難くない。つまり、柯徳三氏の個人的な資質が大きく影響していると思われたため、この内容は載せるに到らなかった。

このような問題が起こった今、それ以外の氏の批判についても載せるべきではなかったのかもしれないと今更ながら思う次第である。

昔から現代に到るまで、田舎から都会に出て行けば、田舎者といって都会の人間に馬鹿にされる。戦時中、都会の者が田舎に疎開した時には、都会の者の方が随分と虐められたものである。こういう恥ずべき虐めは今も存在し、愚かな人間の行為である。しかし、これを指して人種差別とは誰も言わない。それと同様に、彼が台湾人だったから虐められたというより、文化差によって虐められたと考える方が妥当ではないかと思われる。さらに、それ以上に彼の資質が大きく作用して、他の台湾の人たちから聞いたことがないような体験をしているのではないかと想像出来るのである。

但し、実際に、戦後に於いても日本人が東南アジア人を見下していたという事実もあり、日本人にそういう差別意識があったことも事実であろう。実際、何らかの差別があったことは、当時の多くの台湾人の方々からお聞きしている。しかし、柯氏が言うような過剰なものはほとんど耳にすることは無い。ただ、当時は本土内に於いてもビンタ制裁というのは戦時下に於いて極当たり前に行なわれていたことであり、柯氏が中国人でもなく、台湾人でもなく、日本人であったが故にされたという考えも成り立つのである。

ただ何であれ、多少なりも見下しが日本人から台湾人に対してあったことは事実のようである。しかしそれば、歳月と共に解消されていったことも事実である。少なくとも中国が台湾を化外の地と称して全く顧みず差別していたのに比べれば、日本本土の人間が台湾系日本人を差別したのは、無いに等しいものであることも、客観的に理解しておく必要がある。その上で、差別があったことも認めなければならない。しかし、それらはそれ以上の経済的、文化的、衛生的、治安的、教育的恩恵によって相殺されることも理解すべきである。しかし、だからといって悪意のある差別した日本人が正しいということにはならない。それは明らかに恥ずべきことだ。

それにしても、柯徳三氏の体験は、他の人と比較して特異なものがあつたと編集部は感じている。それでもこ

の一つの極めて特殊なものを除いては収録している。それにもかかわらず、虐めや差別などの体験を何一つ載せていないと言う氏の発言は、明らかな事実誤認でありウソである。許し難い話である。

柯徳三氏は医者ということで、世間からは信用出来るというイメージがあるようだが、それと人格が立派であることは全く関係がない。逆に、お互いの合意を翻してこのようなことを言う限りに於いて、明らかに柯徳三氏の人格には問題があると言わざるを得ない。

#### ■その他に収録されている、氏が差別されたと感じた話

『母国は日本、祖国は台湾』には、上記以外にも、柯氏が差別されたと話した全ての内容を収録している。それは以下の通り。

④台湾式のお弁当のおかずをからかわれた話 →P109（日本人の間でもこれは常に行なわれた。）

⑤高等学校尋常科の入学試験で、日本人は成績により公平に選抜されたが、台湾人は、成績よりも名門の子弟をとるという差別があった話 →P124

⑥中学時代、「チャンコロ」と言われたり、女風呂に落とされたり、呼び出されて言いがかりをつけられたこと。→P136（これも日本人間でも常にあったことで、個人的な資質が原因と思われる。）

⑦中学では、修身、体育、図画、音楽など点数が明瞭に出ない科目は、台湾人の成績を低くするなどの差別があった話。→P137（差別があったことは他の人からも聞き及んでいるが、検証しないと、これが正しいということにはならない。多くの人が教師については褒めていることが多いので、事実であれば稀のように思われる。ただ、中にはそういう教師がいた可能性は勿論ある。ただここに到っては、柯氏の僻みの可能性が浮上してくる。また、芸術関係は民族によって基準となる価値観が違うので、そのことが作用している可能性もある。）

⑧和服を着ていた母が「見かけの日本人、心はチャンコロ」と小さな子供からののしられた話。→P140（一部にこういう日本人がいたことは事実である。それは恥ずべき所である。）

⑨中学4年の時、船乗りになろうと東京商船高等学校に願書を出したら、台湾人だからと門前払いされた話。→P145

また、成田との電話では、シリーズ1の楊素秋著『日本人はとても素敵だった』の内容について、柯氏から見ると、日本の良いことばかりが書かれていると感じられた（しかし、同時に、それが誇張や捏造ではなく、楊素秋氏自身が感じ体験した真実であることを認めている）と語り、そのため、自身の本では差別やいじめのことをもっと宣伝したかった、と語っている。（ここまできると、明らかに氏の個人的な復讐心が窺われて、客観的な歴史の検証という意味に於いてはこの本は失敗していると言えるかもしれない。その点に於いて編集部が責任が問われることは否定しない。ただ、冷静に読んで頂ければ、氏の個人的私情と客観的日台関係を峻別して判断することは可能である。）

弊社の本の目的は、出来るだけ事実を残すことであり、ことさらに苛めの実態を強調することではない。また、書籍という限られた紙面では、取材した全ての内容を収録することも不可能である。

柯徳三氏が、苛められ、辛く悲しい思いをしたことは察するに余りあり、その体験をもっと知ってほしいという思いも理解できる。しかし、ただ一つのエピソードがカットされたことを以て、氏が語った日本批判の全ての内容がカットされていたと言うのは甚だしい言い掛かりであり、弊社に対する著しい中傷、侮蔑であり、名誉毀損である。弊社は誇りを持って出版活動をしており、このような感情的事実無根の批判は許し難いものである。なぜなら、この一事を以て他の著者の本全てまでも否定されることになってしまうからである。この点は、断固

として許し難い。

## ■弊社の姿勢について

弊社では、これまでも内容の真偽について、偽りや誤りのないようにと重々注意してきた。前述したように、弊社の基本姿勢は、「事実を後世に伝えていく」ということである。弊社は、日本の何もかもが良かったという立場でもなければ、逆に日本が全て悪かったという立場でもなく、良かったことも悪かったことも事実は残していくべきだと考える。その方針は『母国は日本、祖国は台湾』においても同様である。

同書の出版に際しては、前述のように、苛めや差別待遇に関する日本人に対する批判も多く、それは、台湾人に対する差別なのか、個人的な人間関係における苛めなのか、明瞭でないものも少なくなかったため、編集部内では「日本人の誇り」というシリーズの主旨に合うのかという議論があった。しかしながら、弊社の出版方針が、「事実を後世に伝える」ということであり、また、柯徳三氏の証言は当時を知る方の中でも貴重なものを含んでいると判断し、あえて出版に踏み切った経緯がある。

事実を記載するという原則の上で、弊社が過去の日本の肯定的な面を紹介するのに力を入れている理由は、現在の日本では、日本統治の肯定的な面や、日露戦争や大東亜戦争がアジアにもたらした肯定的な変化について、あまりにも語られずにきたからである。最近では随分改善されてきたが、当時はほとんど無いような状態であった。いまなお日本は、反日的なプロパガンダで溢れかえっている。時代背景を無視した的外れな批判や、マスコミの悪質な捏造は常軌を逸しており、弊社は、その偏向を少しでも正したいと考えている。

日本人が、アジア各国の独立に対して極めて大きな役割を果たし、今日も多くのアジア人に感謝されていること、これは紛れもない事実である。その事実を一人でも多くの方に知って頂きたいというのが弊社の衷心よりの願いである。